

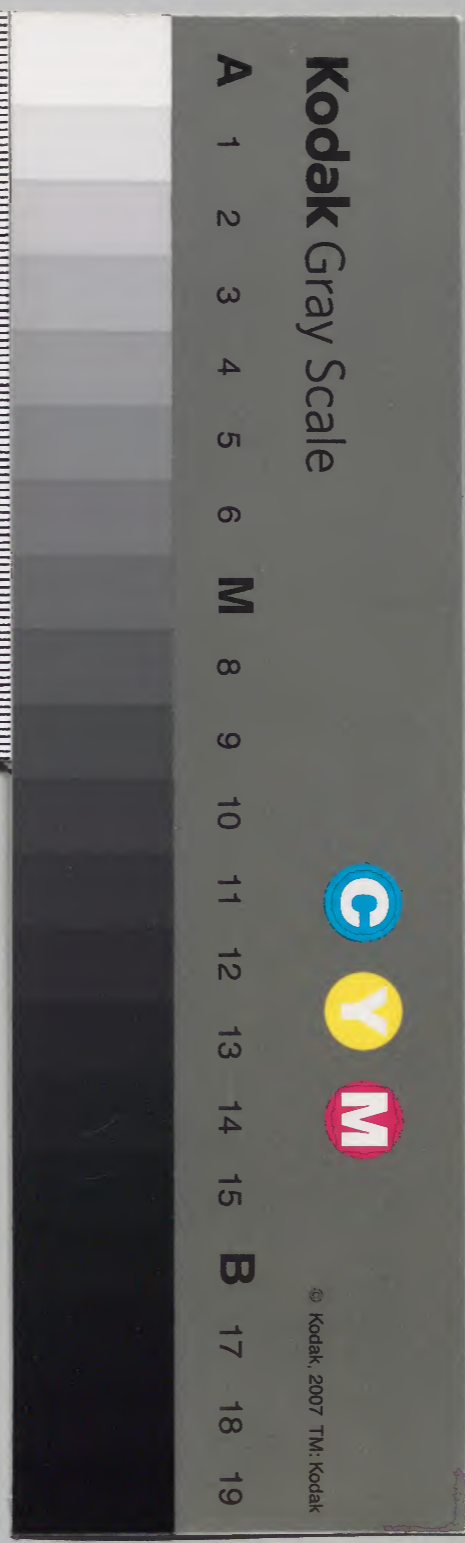
塩尻

目録  
三  
下

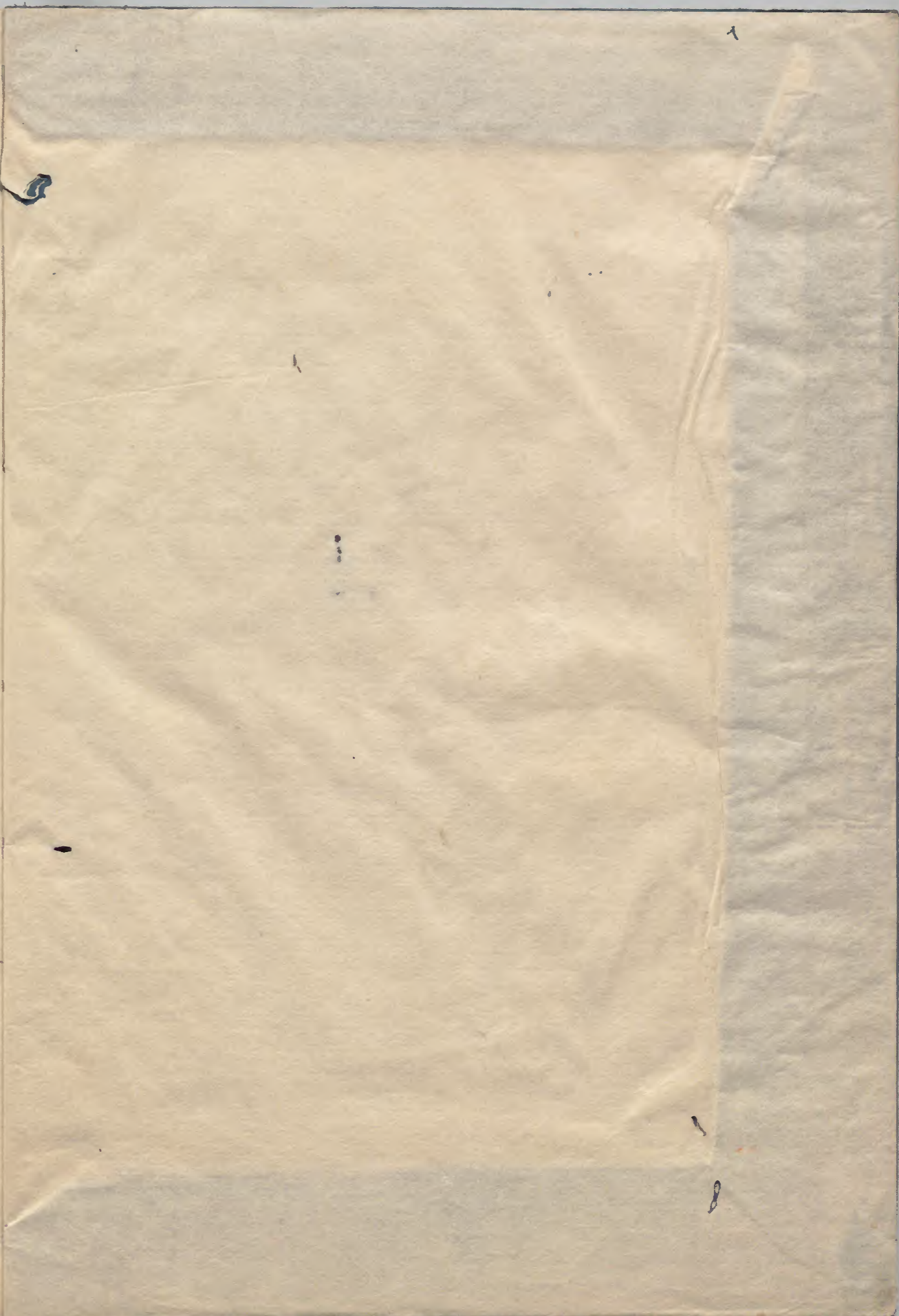
和書門			
三	五	一	〇
九	六	九	號
六	一	〇	冊
〇	〇	〇	架

内閣文庫			
二	一	五	和
一	函	〇	書
二	四	九	冊
〇	〇	〇	架

内閣文庫		
番號	和	25109
冊數	60	( 3 )
函號	211	307







謀得尾張國州東海道... 尾張國... 尾張國...

目錄三

大明一統後... 大明一統後...

我日本平定城... 我日本平定城...

我尾張... 我尾張...

人同... 人同...

...





卷之八

謹按尾張國別東海道ト云キ此ニ尾張國造  
國府等近來迄事

朽木文庫

一 尾張侯忠吉卿御代ニ吉通口迄御畧譜  
之事

一 大明一統使浼拔事也有之

一 我日本平安城系尾城下ヲ教之事

一 我尾東瀬戸村空罾及四郎製之事

一 點心愠紙之事

一 人間郡丈人潔病之事



- 延正三位橋正成墓之事 十
- 元禄辛巳四月洛中池螺之事 七
- 辛巳六月廿日朝大雷之事 八
- 明水陸程限備後出堯為九品以來明二京十三省と云家事 八
- 又日朝若公多厄旌六十六云事 九
- かのの文字とわくは源氏枕草紙古依日記おどえ達十事 九
- 命長記ためは彭祖と云事 十
- 八陣の名事 十

- 明神の字お所 并大明神又大神の字事 十
- 日本書紀多拾綴淮南子三子曆記月令正義等十事 十
- 北越山本廣足事 十一
- 足利家明朝おろし表事 十一
- 類中纂要は武人謁年お用武事
- 符録お守り札云事 十一
- 尤傳莒乃君飯とこの之新飯と仰りお切試し事 十一
- 鉄梗海棠は是和俗云おひとの花と云事 十一



一度會ノ延昌神主云神代卷也指抄事 十三ウ

筑前國香推宮毎年正月七日か之乃人魂ト

云くやと事 十三ウ

朱子語類曰漢祭河と云事 十四ウ

崇有德報有功以立祠事 十四ウ

清和天皇貞觀十六年禁僧尼衣綾羅事 十四ウ

今の世記涌と云事 十四ウ 浮華の虚文と云事

儒者と云事 十五ウ

才人ヲ務し於恩也此ことしてつゝかぬ事と退く

人の事 十五ウ

芫花ト云木の事 十五ウ

紫荆樹と云事 十五ウ

三危ト云事 十五ウ

事と解を人意と不音る事 十五ウ

長二十年七月 大神君二条園白と議

親王座と定メタ事 十七ウ

掃部ハと姓ト云事 十七ウ

主水ハと云事 十七ウ

大明一統志ニ凡そ七人ノ事意と宛ス事 十八ウ



一 謎ノ字しる十九

一 五雜俎。曰官官之号貴と十九

一 正徹ガ三夕のうらみ十九

一 張良ハ韓の爲ニ雙と被せん十九

云事十九

一 猿乐の伎十九

の多十九

一 房中の邪術十九

一 菘撰法師我十九

一 蠅と氣と十九

一 秘傳同言十九

一 今川十九

云事十九

一 神功皇后十九

一 皇朝類苑十九

一 意非天皇十九

一 尾張十九

一 学者欲十九

一 秦始皇十九

一 秦始皇十九



きし事 廿九

馬子山宗復帝と執し奉る并仔用花山院と村  
より事 廿三

帛尸黎密多譯也佛説大灌頂神呪經の事 廿三

茶師經の四譯の事 廿四

荒神の言部陰陽家集の事 廿四

志之象元來居士の術とその事 廿四

又我ふて臨湯家ト混也仁寛ニ始る 廿四

對馬國下縣歌阿麻氏留城國葛野歌天照

御魂神社を波玉月鏡神社の事 廿四

朱子山北紀行の事 廿五

搦季ぬが古今著聞集の事 廿五

妣氏縁ふと拙すの事 廿五

可憎ノ詩の事 廿九

大政大臣憂の一條の事 廿九

稲麥の昔の事 廿六

又半室害の事 廿六

妣又考北辰の名ト云の事 廿六

尾張玉介寺の事 廿六

多羽院ノ天永年中天永ちと十余及に定る 廿六



一 温地呼之曰久千ト云 廿六ウ

一 天神神籬天は盤境の事 廿七ウ

一 呪三首經の事 廿七ウ

一 仏説七俱眠仏母准提經の事 廿七ウ

一 佛説陀羅尼集經の事 廿七ウ

一 同十三佛説莊嚴及場及供養具支料度決の

文之ト云 廿七ウ

一 區廬ト云 廿八ウ

一 今ト云 廿八ウ

一 造加於七鈕為八鈕宮ト云 廿八ウ

一 光明皇后屋浴室ト云 廿八ウ

一 日蓮黨所山宗七面明神の事 廿八ウ

一 文明十七年九月八日於清冽大進物の事 廿八ウ

一 薛文清公の言ト云 廿九ウ

一 閑情小品の文之ト云 廿九ウ

一 困学紀要の文之ト云 廿九ウ

一 西湖志纂要西湖の事ト云 廿九ウ

一 清本ハ汲古閣板ト云 廿九ウ

一 竹生湯ハ於久丈次應持神ト云 卅ウ

一 信ト云 卅ウ



一 名古屋城を今川氏をの事 三十一

一 八雲御抄の事 三十一

一 宇佐八幡石清水八幡の事 三十一

一 南蛮の自鳴鏡の文字の事 三十一

一 麻多尾神の事 三十一

一 博古号漢鑑の事 三十一

一 綿花の事 三十一

一 程子云周茂叔令尋顔子仲尼樂處何事 三十一

一 花鏡の亀俞老片の愈小ありと云ふ 三十一

一 鶴八千年にして蓋松よ安一亀千歳にして荷葉はあり 三十一

一 狐鼠の進退の事 三十一

一 或人乃家四季のうらみ 三十一

一 或人往生講ふと云ふ講乃字の事 三十一

一 世に病とぬき奇と街少者の事 三十一

一 或人癸巳冬お疾を一品准后宮田満院の費之と

清く事 三十一

一 和或人賦梅柳一絶 三十一

一 大和入及足佛世と道進て及る辺連穂と云ふ

と云ふ事 三十一

一 三井寺の乃顯僧故古人の事と云ふ 三十一



と慕ひし事四十八

一 神春望庭吳邦よ六支より家門戸は焼と流る事甲

一 我萱堂康存の時五段を春とあきし夜半の月と云

口はさみの事甲ウ

一 急好法師がみくき物うける中ふ家内より孫

乃多きとありき事甲

一 人の墓を省カレヒと侍りし事甲ニラ

一 殯カレヒ荒ハ送從のち事甲ニラ

一 癸己の冬惠人の地を待莊者とせし事甲ニウ

一 或人問順徳院建曆二年正月廿五日光大師念恩院

迂化し事四十四

一 年、念恩院恩乃る真於供甚良の事甲ニウ

一 他物の字を事甲ニウ

一 長良兼良の心松の事四十五

一 普廣院義教神ハ青蓮院の上童と云る事甲ニウ

一 郁離子の書の事甲ニウ

一 近江玉甲賀令勝ちよ寛平の事甲ニウ

一 考ニ後秀次ニ山の傍よ命ニしニ謠の註ニとニ

一 也ニ事ニ四十六

一 林氏ト於家の神籬の傍と事甲ニウ



- 敬了此新牛の雪中芭蕉の事四十七
- 仙者右藤著地の事四十八
- 春と云僧入宋の事大日景清が伯父ト云ふ四十九
- 大炊玉作を食ひの事五十
- 人と捕つて匂りて猿くひこと云と合せし事五十一
- と出羽小南郷ニ有りし事五十二
- 鵠ハ白鳥と云事五十三
- 梓來唇とハ口のそろり事五十四
- 礎基簿とハヤリ事具日記ト云事五十五
- 昔乃事五十六

- 水中の塩味色と云事五十七
- 細川頼之康暦元年第一首の詩の事五十八
- 幽谷律師初ハ古言ハ儒士ト云事五十九
- 浪華子ガ万国草葉の事六十
- 二月上旬正徳母ノ後ニ先師を不祥春めき侍ハル一詞と吟し事六十一
- 年ニとも換田宮ニ新嘗乃御祭の事六十二
- いゝたる数珠の事六十三
- ひろ山如法經癸巳の事六十四
- 母ノ事六十五



— 同一寺なる所庭に櫻盛にありしと云々  
五二二ウ

— 或人の云寺院に幡々つたのり  
五二一ウ

— 不動明王に四臂二臂あり  
五二〇ウ

— 日蓮堂の寺に安土の御志深明王像のり  
五一九ウ

— 地下にたとひ二位三位に叙せれと下襲表袴指貫  
有紋と不忘る  
五一八ウ

— 或人屏風乃終に處々の名所と色紙形あり  
五一七ウ

— 去福寺の上人の事  
五一六ウ

— 五十年に我國平本の書のり  
五一五ウ

— 結帛の類も又花やよ包て千織よス  
五一四ウ

— 外一カウ軒唐

ナニシヨ  
五一三ウ

— 近世諸家の美々京の妾と召多多く日蓮宗ト云  
五一二ウ

— 僧松養日蓮邪流が所編の書の破又とキ  
五一一ウ

— 邪流ふつと偏と云  
五一〇ウ

— 上巳の日の詩作の事  
五一ウ

— 或来門の菴よ春宵の月と云々  
五〇ウ

— 沙々ノ神ノ善等との北路に男女及ヤ流  
四九ウ

— うない松のり  
四八ウ

— 春水の大師の念佛乃り  
四七ウ

— 東道軒老人光明大師の画像と云々  
四六ウ



詩乃事 辛ウ

侍従信庸の縁奇 院乃御所御入乃事 辛ウ

横渠先生伊川先生乃言葉こる 辛ウ

或寺乃庭なる御後さかりと詠す款の 辛ウ

塩屋の玉の 辛ウ 後より首をとめてをス

尺蠲穿レ提と云文并款乃 辛ウ

正徳四甲午三月十七日公上人日と銘を 辛ウ の迄無の 辛ウ

契日妙普陸号の 辛ウ 親 辛ウ

維摩經 辛ウ

世界要要ト云 辛ウ



僧衣と衲衣といふ 辛ウ

歌事小大原三位といふ 辛ウ

中世の俗語ゆ人と女性と 辛ウ

常徳院の軍義尚の女三時念恩院の住と 辛ウ

そ外系乃軍の女尼あり 辛ウ

人身の十神といふ 辛ウ

真云云秘伝の 辛ウ

天台三大 辛ウ

天台五七 辛ウ

佛法象教 辛ウ



— 沙門來門柴門ノのナニセラ

— 馬の一歳ノ四歳を名しるノのナニセラ

— 性ヲ北らるヲ交リ生スるノ外ハのノのナニセラ

— 東郊ノ花子辞世のノのナニセラ

— 正徳四年甲午四月甲伊豆國ニ所シ殺ス異獸のノのナニセラ

— 甲午六月甲東都大雷所ニ有ルのノのナニセラ 七月初日同

— 以テのノ和スるノのナニセラ

— 或人問我帝王の猛ノのノのナニセラ

— 仏体ニ終スるノのナニセラ

— 下登玉河内弘二荒山神社ののノのナニセラ 七月人と惠

— 南都東大寺宝永六年三月上棟并供養等ののノ

— 浩城氏ハ秀口の男千峯の分流乃るノのナニセラ

— 宇津文氏ハ法真院関白菟家之の庶流としるのノのナニセラ

— 権大外記中原康富日記のノのナニセラ

— 武家御判依括スるノのナニセラ

— 文安乙年甲伏見教御文上事ののノのナニセラ

— 白馬長令ののノのナニセラ

— 僧の准三后宣下ののノのナニセラ

— 浪合記ののノのナニセラ



一 宝永六年丑六月世昇讓位の事 八十五ウ

一 謀生侍足と云一條の事 八十四ウ

一 宋徽宗の崇寧中大を殺する事と大禁ありし事 八三ウ

一 本州海西郡田尻ノ庄長井村の老民兼と云一ノ事

兼連理の事 八十四ウ

一 むし暮露と云一種の僧の事 八十五ウ

一 俗云玄徳丸ノ猿平乃謠よと云法師といふ是と云 八十五ウ

一 寛正二年節進能の事 八十五ウ

一 職原抄侍者ノ事 八十六ウ

一 乞印奠庭上の供ノ事 八十七ウ



一 三方四方盤ノ事 八十八ウ

一 中務部有松村八面の杜ト云事 八十九ウ

一 或云中元の月と詠し中秋乃晴しと悦ぶ事 九十ウ

一 一ノ事 九十一ウ

一 高府港の師虎尾流爰流ノ事 九十二ウ

一 高府港の吉良流知忌氏ノ事 九十三ウ

一 尾石村の四家セ名事 九十四ウ

一 類聚國史天平廿二年二月丁酉大僧正行基和尚

一 八珍ノ事 九十九ウ

一 八珍ノ事 九十九ウ



一 碓臼等の字の本ナナウ

一 去年庚寅榎田神宮古阿伽井ハ尋多ハ飛立ハ引ハ鬚ハの字ハ本ナナウ

一 吳邦の食意ハ日本の膳ハト不同ハナハ

卷之九

一 或人曰浄土宗鎮西西山流ト云ハナハ

一 朝廷の糸友ハ在ハ春日天王寺等ハ三有ハルハナハ

一 今上新殿遷幸の次亦乃事ハ但ハ寶永六年十一月十六日ハなりト云ハ本ナナウ

一 主上右遷幸時ハ至ハ洛ハ海ハ々ハナハミハ

一 後光圀院崩御の時坂本の猿ハ疱瘡ハ是ハ今ハ交ハ新ハ

一 帝御醫某時山王の猿ハ又ハしハかハさハぬハひハしハるハ三ナ

一 光圀院ハ後ハ少ハ松ハ院ハをハ内ハ侍ハ所ハのハ事ハ四ナ

一 け度遷幸ノ供奉ハ栢ハ政ハ殿ハ伊ハ馬ハよハめハきハれハ侍ハるハ事ハ四ナ

一 或武家乃位署ハ半ハのハ事ハ五ナ

一 宝永六年十月廿五日近清ハ殿ハ太ハ政ハ大ハ臣ハにハ任ハしハるハ事ハ五ナ

一 近世の事ハれハ乃ハ終ハよハしハトハキハルハ事ハ五ナ

一 今武家某氏と呼ハぶハ氏ハのハ字ハ誤ハりハトハ云ハるハ事ハ六ナ

一 東鑑ハにハ調ハ度ハとハしハみハ武ハ士ハのハ事ハ六ナ

一 重敬ハとハコハニハクハとハ讀ハるハ事ハ七ナ







系号は諱と記す所のより 三十九ウ

源頼朝源頼家源實朝のより 四ウ

女房の装束キ一物支へ多かり 四ウ

單の事 四ウ

緋ノ袴の事 四ウ

又唐衣乃事 四ウ

小袖の事 四ウ

女房乃小袖の事 四ウ

ぬ爪おのうへは織お御了りあてり 四ウ

小袖の類は相と云 四ウ

香典乃字の事 四ウ

五月廿我京師競馬乃事 四ウ

伽羅乃事 四ウ

客有目我城西六角堂の化縁汗と流を事 四ウ

如野巫唯解一術と云事 四ウ

矣邦折字ヲ以て吉凶と説と相字と云 四ウ

熱田大神宮五月曾供御祝詞の事 四ウ

熱田太神宮神幸祝詞の事 四ウ

字の事 四ウ

衣服の類と云むおと云入と云事 四ウ



— 抱朴子の語の事 四九ウ

— 葉原甚内ハ甲刃の原美濃チカサト云事 四九ウ

— 本州城内の武具窠の紋多キ事 五ウ

— 三十六人の歌仙古傳繪所土佐家ニカ事 五ウ

— 天上天下唯我獨尊の語乃事 五ウ

— 十干ハ幹也ト云事 五ウ

— 范文正公蚊ノ詩の事 五ウ

— 仇池筆記ニ載ス石普醉中語の事 五ウ

— 胡文定公戒子弟ニ云語の事 五ウ

— 本教寺ノ地所の事 五ウ

— 本教寺ニ流の事 五ウ

— 織田家の世系の事 五ウ

— 織田家略系の事 五ウ

— 貞觀十三年閏八月制定百姓葬送ノ地ヲ事 五ウ

— 人多一人の中ヨモ人ハナト云ハ歌ノ事 五ウ

— 九馬寮御監ト云事 五ウ

— 明智光秀乃ハ公方家ノ足頼ト云事 五ウ

— 御位記の事 五ウ

— 斯波治ア太博弋統乃家長名古名言正カ事 五ウ

— 瀬名堰哉尾崎名和等の事 五ウ

— 春日ノ宮と五所ノ皇子ト稱ス事 五ウ



- 寛永十年復教公奉幣執田社の事 六十二ウ
- 松平三河守泰親主の奉仕旧臣の事 六十二ウ
- 致祥院政所の事 六十三ウ
- 或人问我公室の出家人拜礼次第の事 六十三ウ
- 灵陽院の軍天正元年七月の奔後男子と生一の事 六十四ウ
- 関白豊臣秀次其外友位の流の事 六十五ウ
- 後平秀吉延長十八年十月廿日斬白蛇の事 六十五ウ
- 名と改ま式別友と名と式友と名と式の事 六十五ウ
- 秀吉秀頼ハ秀吉の實子あるべと云ふ事 六十五ウ
- 永正記の事 六十七ウ

- 源氏若菜の巻 よきんハこの巻と云ふ事 六十七ウ
- 七曲やの巻と云ふ事 六十七ウ
- 直武林武彦乃七堂と云ふ事 六十七ウ
- 頼田宮海彦門内大石焼の巻の事 六十八ウ
- 明徳三年の軍御元腹事正和二年新列足袋御免の事 六十八ウ
- 日次記の巻の史類の事 六十九ウ
- 近世の年号の事 七十ウ
- 幕下の御院号の事 七十一ウ
- 旗田八劔宮の事 七十一ウ



— 我尾公毎年正月十日御鎧の由祝御的初御る祭初等ノ事 七十九

— 後水尾院震冬御事ノ事 七十四

— 正保二年己酉 家綱公御任友五采の由時と云の 七十四

— 大樹殿下 徳吉公 御誕生御友位等の事 七十九

— 古事の内如ふ今と同じかゝる事 七十九

— 南於真福寺一宗院の藏は後醍醐天皇ノ御与る事 七十九

— 嘉永二年本當氏仲入洛して平家被居の目入とて 七十九

— 靜女若あき中又證貞法京の事 七十九

— 中比事院の粧乃事 七十九

— 或人同後醍醐帝ノ皇后ノ事 七十九

— 松平村木松山宮月院 并 七年の事 七十九

— 妙大寺村は是の字の寺ト云ふ事 七十九

— 三友長沢の十一家の事 七十九

— 御油二家ノ事 七十九

— 杉山村は柳松ト云ふ事 七十九

— 八幡山ニ宮良明社二所あり 七十九

— 冠の老魚ノ事 七十九

— 戊子正月廿四日公宴 由會の事 七十九

— 府下の性多院ノ事 七十九

— 我府下 神君神幸の時音楽の事 七十九



- 宝永五戊子十二月立坊立后并三月八日皇居子亦炎上乃事 八四ウ
- 少彦のよさみ乃事 八二ウ
- 日本乃友後裾の事 八二ウ
- 沸湯探り火を握しめく虚実を驗み侍乃事 八三ウ
- 康山聖諭十六歳乃事 八三ウ
- 乃君難七歳乃事 八三ウ
- 張横半六看の事 八三ウ
- 類纂曰宮殿高ヲ侈謂之土木ノ妖ト事 八三ウ
- 衣ナリキトハおまふあましと云歌の事 八四ウ
- 吾國冠後推古の御宇ニ始ル事 八五ウ
- 稻荷ハ習合者流の説ト云事 八六ウ
- 國為地戰者不能成王ト云語乃事 八六ウ
- 今日國家所令ト云一糸乃事 八六ウ
- 後水尾院明正院等の事 八七ウ
- 柿本人丸の事 八七ウ
- 秘奇一首の事 八八ウ
- 七千巻と云とくよ笑ハおもひなりし乃歌乃事
- 笑乃歌乃事 八八ウ
- 沉吟聞人一善ト云歌乃事 八九ウ
- 昌州海棠有香ト云語乃事 八九ウ



一 男色之好人始しる九十一ウ

一 寿品有吐泉の九十二ウ

一 彭祖七百餘歳卒九十三ウ

一 葱嶺點蒼皆六月積雪の九十四ウ

一 崔生鸛と云九十五ウ

一 羿善射而卒以射見殺と云九十六ウ

一 漢武帝惑於鬼神心信すと云九十七ウ

一 英宗天順八年九十八ウ

一 武宗正徳三年九十九ウ

一 唐文宗復日詩百ウ

一 僧尼孽海百一ウ

一 先キ天正十一年毛受百二ウ

一 忠孝類統曰嗚呼毛受百三ウ

一 或人問猶百四ウ

一 癸未の年於百五ウ

一 念佛よ和百六ウ

一 鐘ハと樂器百七ウ

一 東坡硯蓋銘百八ウ

一 朱子曰百九ウ

一 汲冢周紀解百十ウ



— 賈誼書俗政語衆生し字くしり 百三十四

— 大戴礼子日ト云一條のり 百三十三

— 鮑照阿清頌ト云一條のり 百三十二

— 梁處士傳席ト云一條のり 百三十一

— 李大白ト云一條のり 百三十

— 大玄之次ハト云一條のり 百二十九

— 東方朔傳孝武の時ト云一條のり 百二十八

— 浅野長矩の室詠奇の事 百二十七

— 癸未の冬関東大地震の事 百二十六

— 友職秘抄の撰者くしり 百二十五

— 職原抄の撰者のり 百二十四

— 神祇友と神宮なくしり 百二十三

— 中野改元次才くしり 百二十二

— 諸々著仗才ト云事 百二十一

— 関白宣下次才畧くしり 百二十

— 改元庭候畧多し事 百一十九

— 改元畧記し事 百一十八

— 新田大炊助源義重くしり 百一十七

— 徳川廣忠くしり事 百一十六

— 尾候引西の御幕及白旗くしり事 百一十五



一 観音寺重房上杉の庇と領ス事 百五十九

一 問櫛ハ神の御正体ト云事 百六十

一 又問戟の事 百六十一

一 去一癸未の冬女子七八才及みたる事 百六十二

一 或人問俗謡よりと云事 百六十三

一 公郷宣下抄曰云人方宣旨ト云事 百六十四

一 伴舞大神宮ノ称宣及波二位ノ事 百六十五

一 後漢中西城傳大月氏云事 百六十六

一 太平乐ノ事 百六十七

一 むまめ乃こつかくなりき人歌の事 百六十八

一 乙酉の春春日の祓之呼尋詠歌ノ事 百六十九

一 上総国市原郡姉ヶ湯村の土民忠ノ事 百七十

一 同人市多事記文の事 百七十一

一 載陰階録李善并右市多事記文追加ノ事 百七十二

一 あ家業門辞世の事 百七十三

卷之拾

一 尾張氏仲定初中野又云清女と娶及宣祥雲女と再

要セ云と云事 百七十四

一 徳政稲葉山の城之一色義於禪僧傳そ云と云事

百七十五



一 凡流云云ニウ

一 契田宮御平一多賀神体一彩ニウ

一 去ル丑九月大神宮式年造替の時荒木田度令争論ニウ

一 萬葉集四種書式ニウ并字訓ニウ

一 石イシトウラ并字訓ニウ并字訓ニウ

一 倭城の香ニウ條ニウハ色ニウの品ニウ入ニウ

一 貞觀以後天下諸社一同ニウ階ニウと奉ニウ

一 三十書神品ニウ

一 旧事記中臣ニウ

一 朝野羣載永昌記中右記其外ニウ

- 一 宗源宣旨ニウ
- 一 職原抄二卷ニウ
- 一 美濃國椎加納大井ニウ
- 一 或問久松氏代々ニウ
- 一 石司郷司ニウ
- 一 台記曰攝政者ニウ
- 一 二条弟ニウ
- 一 二月者の傳ニウ
- 一 イフセトニウ
- 一 太平記ニウ



一 萩奠萩菜之事 三十八ウ

一 鉢、椀、王の食器之是三種の事 三十九ウ

一 ヲホロケト云る事 三十九ウ

一 イカケト云る事 三十九ウ

一 神祠のち獅子と云る事 四十ウ

一 梅村裁字曰ト云一條之事 四十一ウ

一 三絃ハ元時始ると云る事 四十二ウ

一 今我邦神家曰無上灵宝と云る事 四十三ウ

一 春秋内事曰ト云一條之事 四十三ウ

一 淮南子曰月天之使と云る事 四十三ウ

一 文昌雜録云ト云一條之事 四十三ウ

一 萩名ト云一條之事 四十三ウ

一 自伏羲畫卦而易之道始著ル事 四十三ウ

一 三明劉敞曰ト云一條之事 四十四ウ

一 或曰般若三藏所譯ト云一條之事 四十四ウ

一 元禄庚辰二月七日尾城下火災と云る事 四十四ウ

一 兼隆礼所撰遼志ニ曰ト云一條之事 四十五ウ

一 和歌の三神と云る事 四十五ウ

一 天道神ト云る事 四十五ウ

一 横ガタと云る山温泉と云る事 四十五ウ



一 後漢孝光武記東庚の二條五十二

一 柳と玉串五十三

一 長者言五十四

一 知世人所憂五十五

一 竹林院入五十六

一 柳五十七

一 不以道得富貴五十八

一 我敬公薨五十九

一 王摩詰集六十

一 或人問俗六十一

一 端午の旗六十二

一 近比乱世六十三

一 魯三家原始六十四

一 宋玉子司業六十五

一 居士六十六

一 宋景濂集六十七

一 小倉家六十八

一 朱子六十九

一 亭景七十

一 讓七十一

一 後漢孝光武記東庚の二條五十二

一 柳と玉串五十三

一 長者言五十四

一 知世人所憂五十五

一 竹林院入五十六

一 柳五十七

一 不以道得富貴五十八

一 我敬公薨五十九

一 王摩詰集六十

一 或人問俗六十一

一 端午の旗六十二

一 近比乱世六十三

一 魯三家原始六十四

一 宋玉子司業六十五

一 居士六十六

一 宋景濂集六十七

一 小倉家六十八

一 朱子六十九

一 亭景七十

一 讓七十一



一 尾丘之山ト云一條ノ事 六十四ウ

一 或人問隠士石川丈山ノ事 六十四ウ

一 本朝以西城之神祭ル事 六十五ウ

一 太神宮の千本堅魚木心御柱ノ事 六十五ウ

一 鳥居ノ事 六十九ウ

一 壬午、春江武人のものゝ歌ノ事 六十九ウ

一 括異志ノ采至和中成郊の者ノ事 七十一ウ

一 山城国稻荷社名義品ノ事 七十一ウ

一 右古屋三た事ノ事 七十一ウ

一 貞徳公横見の松ノ事 七十一ウ

一 壬午の二月初メ西ニ白糸を落とす事 七十三ウ

一 或人のもとニ鳥の少き事 七十三ウ

一 倭俗以三月三日為海浴ノ事 七十三ウ

一 沢原とねの事 七十三ウ

一 装束指掌ノ事 七十四ウ

一 同忌用次ノ事 七十四ウ

一 幅轆故ノ事 七十八ウ

一 人壽百歳七十稀の詩ノ事 八十ウ

一 大樹御母公御位記ノ事 八十ウ

一 韓文云蓋棺ノ始テ定云事 八十ウ



古款表度々ひ定てのうゝノ事 八十四

丹後侍従配流の始うゝノ事 八十四

日本三不足ト云る 八十一

問津閑事ト云一條 八十三

前持大納言源忠房に采地と増一ト云る 八十三

伺候於公卿之内ト云文是送李原飯盤谷席の被

すの事 八十三

隆御湯正三美重ト云一ノ事 八十三

伴勝友宮造管御近玄料の事 八十四

年代一統記隠元禪師の事 八十四

破窓漫筆の被すの事 八十四

不懷室ト云一條 八十五

いろはの中へつゝの事 八十五

敬公乃すゝの四歌の事 八十五

凝寂堂筆記被すの事 八十五

庚辰の季秋西郊の波の表に被すト云一條の事 八十六

鐘を録音ト云一條 八十七

司ふ公曰ト云一條 八十七

机上一洗司馬子十科擧士法の事 八十七

我今年致仕帰故郷ト云一條 八十八



一 笑胡盧ト云一條ハナハ  
 一 毘那衣伽天ハナハ  
 一 中比本列名古屋村ハナハ  
 一 三品寺辺本城地ハナハ  
 一 大久保乃見寺長安八觀世某が子ハナハ  
 一 居士と隠者の祐ハナハ  
 一 江呂唐湯乃松ハナハ  
 一 或人問観音三十三乃事ハナハ  
 一 宝永五年二月東宮御安ハナハ  
 一 東宮坊の事ハナハ  
 一 中交職乃事ハナハ  
 一 戊子三月八日京師火災ハナハ  
 一 契田糸之家領ハナハ  
 一 又契田古流文ハナハ  
 一 契田加多氏畧系ハナハ  
 一 或人曰舎人ト子リトハナハ  
 一 和那吉野ハナハ  
 一 葵乃巾ハナハ  
 一 今胡望ハナハ  
 一 八日主君ハナハ



幕下及び公族歳首内宿神免の吸扱の事 九十七

我尾府浄寂人の端小浄珠法の支刻の事 九十七

神君諷くく 九十八

公安天人諷乃事 九十八

延喜二十年五月七日茶磨山の御陈营夜 九十九

秀乃於生死の事 九十九

我古昔人字 百

王公諸家の敏炎上付て園東の造と并

令銀給り 百

明太宗徳武三年大廟の奉祀と製衣 百

一 匈奴月氏の主と殺せし 百一

一 職原鈔曰聖徳太子始て定冠位十八階 百二

一 十八階 百三

一 戊子四月廿六日松娘君ノ御方浄縁組定り 百四

一 上及敏林の城より可築 台令 百五

一 方途志 百六

一 草薙神劔の浄 百七

一 或記曰永享七年壬月天野氏免ヲ狩リ 百八

の始 百九

但先ニモ云 百十



一 棋六太坂ハ中世迄石山ト呼ル百五ウ

一 新田の紋中里ト云フ百五ウ

一 序の笏上下の説ル百六ウ

一 尾只伊家人ノ始教ル以来ル百六ウ

一 明石臣云ハ以テ派ノ百五ウ

一 宋ノ名臣云ハ以テ派ノ百五ウ

卷之拾一

一 淳曆ノくキ始訣ヲ者ハ四十二章也ト云フ百

一 堯山堂ノ外紀載ル日本人之詩ノ百

一 不用磁針知南北術ノ事ヲ

一 足利家十位ノ事ヲ

一 伊當家十位ノ事ヲ

一 磁器ノトシトシ秘ストシ物ノ事ヲ

一 籍記要ノ於テ字ノ當々ノ事百

一 仲哀天皇諱足仲彦ト云フ一條ノ事ヲ

一 論ニ船ノ字ノ事ヲ

一 新譯仁王経ニ曰ク一ノ條ノ事ヲ

一 子曰事ニ若シ教ス其ノ事ヲ而後其食ト云フ百

一 馬頭生角未レ為レ難ト云フ七言絶句ノ詩ノ事ヲ

一 人心莫レ不レ有レ知ル惟ト云フ一條ノ事ヲ



一 倭俗物の自由ありけりけりけりけりけり  
こトろり 四ツ

一 依保娘とまよと 新田娘と秋とすろり 四ツ

一 載庭槐五行続論云一條ろり 四ツ

一 韓子美里操と程朱の説ろり 四ツ

一 寛永中幕下武家系譜と正して禄ろり

一 妙しし時儒士俗流論云ろり 六ツ

一 本芳の梯のろり 六ツ

一 懋時金鑿合香といけり 六ツ

一 青春不再來の絶句詩ろり 六ツ

一 夫虎ハ山獸の君ろり 我狼とソカととおろり  
云一條ろり 七ツ

一 予問真聖的繩曰云一條ろり 七ツ

一 午歌天王ろり 七ツ

一 余按三瀧山號三諾山一條ろり 九ツ

一 山王論ろり 十ツ

一 執田和歌會ろり 十ツ

一 春日井歌吉根村新らろり 十ツ

一 山川瀨月涙沾衣ト云絶句詩ろり 十ツ

一 丹波玉白山八愛宕山ノ四号ろり 十ツ



一 栲綱絶殺々飛エウ

一 因不生自要戒エウ

一 種休産エウ

一 鳳足歿銘兼席エウ

一 名エウ

一 田圃と東エウ

一 筆エウ

一 著エウ

一 歳徒の方エウ

一 万葉集エウ

一 浅エウ

一 占猫晴エウ

一 俗エウ

一 踏エウ

一 正エウ

一 兼エウ

一 去エウ

一 糸エウ

一 尾エウ

一 前エウ



一 行教法師ハ八幡大神の御体七条の装束現一  
クヤ一と云一條十九ウ

一 薜敷朝日不責人ト云一條十八ウ

一 枕草紙よ母屋のすりのとわくと云一條十九ウ

一 或人トウヘトハガキト問一十九ウ

一 比日人の許まで猫の尾と捕へて其生一十九ウ

一 与一十九ウ

一 南秋鬼神論ニ云トソ一二十ウ

一 住吉の社傳よ吾无体以正重二十ウ

一 洛东蓮華王院の敷矢二十ウ

一 赤文改及系叙用と母及ト云二十ウ

一 三エウ

一 恭斬從又位下刑ア大捕源幸和二十ウ

一 玄旨法平和奇流方抄ノ一條二十ウ

一 朝鮮石洞趙云トソ一二十ウ

一 春日とウケト読花多とあせト讀歎字訓と

一 心よべとソ二十四ウ

一 或人曰西のうらの地二十四ウ

一 京多のやの女の詠奇二十四ウ

一 慰練二十ウ



一 世上毀去非善惡ト云々三十九ウ

一 人物競<sup>ニ</sup>紛<sup>レ</sup>苞<sup>ト</sup>云詩三十九ウ

一 丁亥七月十日夜星月と貫三十九ウ

一 橋加大坂地震也改三十九ウ

一 紀伊熊野地震也改三十九ウ

一 畫三十九ウ

一 或人問中世の事礼<sup>ニ</sup>谷<sup>ノ</sup>文三十九ウ

一 又問桃子女口<sup>ニ</sup>河<sup>ノ</sup>説三十九ウ

一 又問蝶花形三十九ウ

一 我公沙家人の三十九ウ

一 前將軍家御中陰三十三ウ

一 二月十日此 大納言家御系諸三十四ウ

一 御屋所公月沙傍と三十四ウ

一 在稱三十四ウ

一 前將軍家薨逝の後沙牌字三十四ウ

一 今我公家 東照宮以下沙徳号三十五ウ

一 尾呂斯波の紋系系号三十五ウ

一 尾呂丹羽那稲木ノ庄犬山城三十六ウ

一 勢田ノ社大官司及び祝師号袍の紋三十八ウ

一 又問大官司諸子と主維と祝師家熱檢校



家の 三十八

侍の礼後 甲

洪武故事云角船船六國所造ト云一条

建武延元の比船船五隻丸入及之

夫往古ハ古司の号外ト云

乾野群載二十卷の序憲宗我の人の位

記の 甲

今度故黄門遺物ト云一条

今般家於お統ト云一条の但右二件一条殿近侍殿

介尾の假一ト云

甲

色幣短冊と 甲

己丑の日の部の関東御昇を

五月の堂上方の御餐意様 甲

あり十六尾云此云水戸公會盟

文武の友人 甲

凡係子叙出り又從五位下の位昇る

西条正法山妙心禪寺の地昔三籍田の後ト云

第一 甲

勢凌欠と云字花け勢の字の 甲

楠正成初 甲後まと云けト唱へる



淡海公不比等あしと唱る 四八ウ

或人の曰朝廷の少佐と云一条と唱る 四八ウ

尾呂の借し初草とあそむちと唱る 四八ウ

平伝長桶の役とあそむちと唱る 四九ウ

地下の友人堂との列と加倚と唱る 四九ウ

唐船と十羽の樂と立ると唱る 四九ウ

羣中要老の三鹿民婚礼の条と唱る 五〇ウ

處已發語曰云一条と唱る 五〇ウ

居官發語曰云一条と唱る 五〇ウ

徳方家にお加波を留と云詠ちまると唱る 五〇ウ

織田信雄と世とグヲト續と唱る 五二ウ

異性相統諸家大聚と唱る 五三ウ

武家と始とる君とる目と棒と唱る 五三ウ

武家と日月との神と唱る 五三ウ

椎の系折と唱る 五四ウ

棋品兵庫湊醫王山廣巖室翁孫と記 五

楠正成戦死記と唱る 五五ウ

皆を新銀呂と唱る 五五ウ

け表と月廿九の府下富士塚町淺長氏と唱る

井介砂銀と唱る 五五ウ



一 正月の比が本宮路迎也山は麦の実の如きもの  
おのぼるゝみのゝゝ五十九

一 人家は物多しと云一条のゝ辛六

一 周の代をハ燭のゝ何て焼かすゝと云辛六

一 名入の訓のゝ辛七

一 修り者を地の蒼えり時ハ福の餅とふゝと

云五十七

一 享保九甲辰六月其の末の寸の毛

ゆゝゝ五十七

一 難波まき松むゝ葉ト云辛八

一 そのかゝ細川三将家士と云ぬ人ゝ又せらやの

歌辛八

一 大和玉耳あゝ山は伝きゝ浪士のゝ辛八

一 哉中玉婦負取鴉坂神社の祭のゝ辛九

一 顯昭法師のいゝせんゝさゝの表のと云ゝの

事五十九

一 居家必備母菜枕の方辛九

一 朝鮮の学者ゝゝ来子ゝ従ひて及と講

せゝゝの多き辛九

一 東園秩父三千三麦めの觀音像のゝ辛九



一 凡観音形多くの形像あり 六十一

一 梵字のり 六十二

一 け外夷監観音八度士の故あり 六十三

一 象象の文字のり 六十四

一 端半長余縷のり 六十五

一 編茹 六十六

一 三才号舎舟又懸宮室一の号のり 六十七

一 或曰吳邦其形より若大の字と象し 六十八

一 今世縁といふ昔の封戸縁も織田信田等 六十九

一 ともやト云る 七十

一 古人文武友人のり科と云 七十一

一 古く玉司の年給料と云 七十二

一 古く玉司の任ト云 七十三

一 朝廷辨賀の并踏た右記 七十四

一 た近右近の疎八臣下北面 七十五

一 七十六

一 沙店司ハ源氏相譲 七十七

一 三浦厚守陸奥 七十八

一 七十九

一 石塔の形 八十



— 本紀三本のり 六十九

— 系家おりのり 六十九

— 記録のり 六十九

— 傳記おりのり 七十

— 家本誌家の事々籍多く散亡のり 七十

— 沈木孫七部は長りのり 七十

— 諸家各記の題目ト云一条のり 七十

— 神谷石見事々於ト云一条のり 七十

— 寺埜と和良誌お傳ト云る 七十

— 天文七年三月畠山義忠僧昌虎として

— 明教小入のり 七十

— 天文二十年六月筒井順眼卒のり 七十

— 筒井順法法下て正十二年八月病死のり 七十

— 筒井の家人松倉を後ち事々改り子と云る 七十

— 傳は姓と家々あり 七十

— 三良誌家の月牧野たる元神名武切抜群

— の人々のり 七十

— 元弘の始に夏次なる為厨言景長沖と称号と

— せりのり 七十

— 尾呂中治郡大栖庄志福ちのり 七十



一 同高くても又高のくくても 同時よある  
ちス時のり 七十八ラ

一 浄土宗坊々寺等の檀林訃化の夜学問の  
次方のり 七十八ラ

一 尾呂二宮大縣神社社主田名系のり 七十五ラ

一 安庭氏あ流りとり 七十一ラ

一 癸巳因六月十日古井よ入る者所死のり 八十三ラ

一 了我新三希嘉勝お家のり 八十三ラ

一 色只演書の双普流ちの用祖のり 八十三ラ

一 甲午貞使琉球人十月大坂とあてお急のり 八十四ラ

一 或人云琉球王の世系と尋し 八十四ラ

一 薩摩列附庸中山王代くのり 八十五ラ

一 俗よ白子トソのり 八十六ラ

一 秋後右京を交お真ッる 八十六ラ

一 鏡葛孔ぬる 八十六ラ

卷拾二

一 武及よ竹葉茶ト云茶何る 一ラ

一 戸山の御殿中庭よ破帽カサ額と云茶何る 一ラ

一 同系人利体よ居士号勅授何る 一ラ



— 尾上上田村津須村津治村の村々の事ニラ

— 轉注し器ト云ふニラ

— 口程ノ鑑ト云ふニラ

— 合掌天竺の法ト云ふニウ

— 年奠市浮の歌ニウ

— 早湯やの歌ニウ

— 春日井親を北山就永寺山本衣笠内府の

歌ニウ

— 盃ナヒ先酒器乃名ト云ふニウ

— 日本天武紀遺多稱治使ト云一糸乃事ニウ

— 心流と題せし加角寺のぬき事乃事四

— 延喜帝先賢の肖像と写んとする事ニウ

— 清と尋ふ事ニウ

— 勇忍キナ又深ト云名不何りヤト云ふニウ

— 松虫シラ珍虫と書ふ事ニウ

— 今度新編の職役系々よ今国東書長近藤の

友人と命し事ニウ

— 比叡山延暦寺の事ニウ

— 妙音院お玉師長治兼云々冬尾忍ニウ

— せりし海路の時列まいらせし極女の事ニウ



一 昔大まの内府妙音院入及おあそ琵琶と名  
ひたりしりセウ

一 甚知那中根唐御器所村の比丘陵のりよ一  
株の松有り一本の長志の塚ト云セウ

一 又古井店よを帝塚ト云有りる走り塚と云  
しりハラ

一 世に隠退と好ム人用とあさる急慢のまよ  
し虫と云バウ

一 甚知那八事唐真正律と大日の像のりバウ  
或医師死しを假牌と前法橋橋某と事し

誤り九ウ

一 私の中巻も巻号ハおろそまな居づく趣かず  
と云九ウ

一 大社の内記よ移ころいと云物と云ハラ

一 近世事札の終りしとト事ハラ

一 少右記長保元年九月十九日内程の内猫産子と  
産ハラ

一 二月初年の移いと云しと云ハラ

一 鴨長明日和琴の起りハ六張の弓と弾鳴し  
て是を神楽と申ししと云ハラ



- 一 東の海士のとりくさのり 十一ウ
- 一 薩摩浮ようあゝさあゝト云のり 十一ウ
- 一 鎮西糸帯おた矢の号のり 十一ウ
- 一 源義経衣川の靴、死せし道一と云又まどの地、鴻巣ら道一と云のり 十一ウ
- 一 兒女の穉は解とわちんとあふるのり 十一ウ
- 一 治津家の軍令のり 十一ウ
- 一 蒼山院右大臣家輔のあてははやく配流かの地、一男子とまうけまひ一と 十一ウ
- 一 禅僧及鼻衣の繰、組とまうけゆいせと卒

- 一 江常と名つゝるのり 十一ウ
- 一 或問関東と八色坂汐席の関、以东とゆと云 十一ウ
- 一 別祖 別族の初祖 氏宗 氏中の宗長 及三位以上のむじ ハ家营地は墓と違一と云 十一ウ
- 一 或曰友家お衣束の中は宮舳と云何と云 十一ウ
- 一 或云米穀の俵は糸と成るを横は細繩といふ、然しそ後は不動繩とくけらる 十一ウ
- 一 伴勢は終焉百年末社と云 十一ウ
- 一 堂は榎は家ハ根本なる倉家へ或ハるは終



- 家ト云るヲ并系号のヨリ 十四ウ
- 之ヲ盛久由井渡ルモ路ニミシ人トセー  
時大カ折シ—— 十五ウ
- 孟蘭盆會ヲ供托ニ荷系ト申ス 十六ウ
- 普度院義教ヲ軍真河上人ニまかせ  
リ建—— 十六ウ
- 真河内院ハ後龜山院の皇子といふ 十六ウ
- 乙未の表世の中不敷ルニて民百苦—— 十六ウ
- 山城五栗田口蹴<sup>アキ</sup>舉<sup>アキ</sup>ノ水ト云所河ヨリ 十七ウ
- 明月紀云系ト云所所殿のヨリ 十七ウ

- 日本記畧 天延二年 糸下二六日 十六カ公家  
自今年迄奉是馬花勅系のヨリ 十八ウ
- 榎トエノ木と續ヒヨリ 十八ウ
- 或曰盛衰紀蔡名厄々ニキと訓ス 十八ウ
- 幸祿ト云日家ニ祭ル年徳祿のヨリ 十八ウ
- 或同宇治の茶ハ何時カ神リ—— 十八ウ
- 同平等院の何ニ堂其制表他ニ異あるヨリ 十九ウ
- 古——ハ帝教の寺院ニ山号カ——且鐘ト云  
此ト云るヨリ 十九ウ
- 日本美記尾張五堂知歌片幅ハニ女の大カ何リヨリ 十九ウ



一 元禄十年丑东郊ニ新ニ銅錢と鑄るニナラ  
 一 同十三年京師ニとも同のニナラ  
 一 康大師蔡魯公と徐神龜同のニナラ  
 一 近自津及とてさるニナラ 新説多き同あるの  
 一 故のニナラ  
 一 首作特のニ新始と列西と新ニナラ  
 一 日本紀ニ尾張河津の界と務治河河とニナラ  
 一 享保十年四月十七日宇佐津文太夫と大官目利  
 一 降中務少輔一再營のニナラと国東一語セニナラ時  
 一 石清のそと和奇のニナラ

一 弘仁九年三月一 改長門を司る 濤 濤司ニナラ  
 一 景行紀ニ蓋と浮世とニナラ  
 一 日本紀征隼人持良お軍大伴希称隼人  
 一 ト云まけ友名後世あるニナラ  
 一 奥州岩城山控現ハは恒弘家の南ニ祭神  
 一 安来やニナラ  
 一 尾忍のふかふかニナラと勅詔の古詠ありニナラ  
 一 い川ニナラ荒廢のニナラ  
 一 井井の字のニナラ  
 一 柘梨とそ瓜のニナラ也ニナラ味不好菓のニナラ



一 時宗松以上人百日あはれハ回西ノ及倍習女  
附送ひしるニテ六テ

一 奇吳報談集ニ足地を人 活る一糸結ニテ七テ

立糸のニテニテ

一 吳邦敵饌ニ戦とえとひるニテ七テ

一 紅夷食すコトニテ 治ニテ七テ

一 仏祚のあは急ニテ八テ

一 拾苴抄十訓抄及ひ袋茶子あといひ天の

栲立ト云一糸のニテ八テ

一 奥福寺ニ宝冠院と云何ニテ九テ

一 山城玉ニテ八テ

一 四分律ニ燦筒昆波律ニ陀婆圍の名ニテ九テ

一 櫻路ニテ九テ

一 小野山町ニテ九テ

一 紅夷ニテ九テ

一 近き比京原の某武志少海の門ニテ九テ

一 皇女ニテ九テ

一 皇女と何子ト子の字と呼ハスニテ九テ

一 介ニテ九テ

一 后文のニテ九テ



一 門院号の始のり 三十一

一 年号改元の式戦玉の時名記七て古法

一 陵夷せしる 三十一

一 大長持大食の数のり 三十一

一 散位某とす 三十一

一 今時六位袍の色のり 三十一

一 海中よりいりしとて紅帳の類ひあるものる

一 乃花名と出ス 三十一

一 和川を舟心のもり今市の駅今東北六七里

一 中嶺ヶ峯の下河合よ長禄元年の冬横

一 死を二の交君の四流 三十三

一 又源義経魂をいれし時白河やの小袖の

一 袂と切捨む 三十三

一 又かの山をいぬ福ふも天の岩やトツ

一 ち外色を奇る 三十三

一 真の伴恒今別と云候 三十三

一 ち外奇 三十四

一 官と授ふとはずといひ後よ果る城叙と

一 と職に命を 三十五

一 疾を八友法勢ハ職也補 三十五



一 非たハ高貴の死と云ふ事 三十九

一 我おびしし仏法よ的したる人と云ふ事

一 刺髪しして度と云ふ事 三十九

一 今俗彈基と乱基とと不知る事 三十九

一 茶舎とスキト云字と云ふ事 三十九

一 孫子よ兵ハ詭道也と云ふ事 三十九

一 韃靼 正黄旗 正紅旗 正白旗 等々云々

事 三十六

一 御香宮の事 三十七

一 おも傍の尺八と業とする事 三十七

一 雞よ本綿とつむぎ 園のぬれ物に散つ事 三十七

一 古しし文人いしフタキといふ事と云ふ事

セーし事 三十七

一 石戦といし千トリ云事 三十七

一 田向と東玉の僧よトウモと云事 三十八

一 妒と妬と俗誤り用ゆ事 三十八

一 関東の俗談の事 三十八

一 琵琶の矢名と月琴と云事 三十九

一 近衛前殿下と云ふ所の春園東御下向の事 三十九

一 毛利元就朝臣と云ふ所の主丸因義隆々の仇陶氏



と誅せしむる三十九ウ

一宮祢号左右分敷其外祢牛の三十九ウ

一近湯前殿下東於溪乃以飯すて以詠奇の

る甲ウ

一茶葉のほろくよおく露の玉とりの詠奇の

る甲ウ

一隱の字のる甲ウ

一復四月ニハ階徒出福詔叙一里計一辱兼君命

見寝えく境一糸のる甲三ウ

一煇帝迷樓記のる甲三ウ

一賀茂御葵沙神幸列の四六ウ

一漢卿間天神地祇之義一糸の五十一ウ

一神代の巻曰處小島の五十一ウ

一畫者如あり蠅而弄騰と云一糸の五十一ウ

一乙酉東於大久保る糸飼猫矣猫と書る五十一ウ

一也醫惠勇揚上池院号る五十一ウ

一有一徑丈涉河而渡其妻進歩不及隨河

死る五十一ウ

一法胡紀聞曰並蒂荷苞の五十一ウ

一利園樂工とえしる五十一ウ



- 後撰集十九和歌のり 五十三ウ
- 白朧白瘠生硬の字釈のり 五十三ウ
- 月くれはま川越へと云和歌のり 五十三ウ
- 光臺より入るハ入るかきと云和歌のり 五十三ウ
- 伊弉のまのむせし云宮の号のり 五十四ウ
- 虚海紙惟神是宅ト云一条のり 五十四ウ
- 少寺下地も源を産神鏡家姓氏のり
- 京師所司代のり 五十五ウ
- 泉南坂聴のり 五十五ウ
- 肥州長湯港司のり 五十五ウ

- 駿州走水吏のり 五十五ウ
- 揚州東生郡生玉唐大坂城のり 五十五ウ
- 高津宮系和歌のり 五十六ウ
- 大猷院婿お國御歌のり 五十六ウ
- 大濫有格宮大夫ト云 五十六ウ
- 正平二年戊子後村と院賀名生と御近のり
- 大平記曰帝の法六宮以下平侍といふ一条のり
- 苑と檢取のり 五十六ウ
- 箒ハ大石と運ぶ器ありと云 五十七ウ
- 或人云仏經に火坑深水刀杖等所難く時の釈



のり 五十七ウ

一 空潭明月ト云 詔のり 五十六ウ

一 芥及真灌頂ト云る 五十八ウ

一 楊黒老ハ吳陽染魁といふ 五十九ウ

一 赤靈氏武のり 五十九ウ

一 日本後記古久氏家系ト云 一条のり 五十九ウ

一 之坂洋正ト井上新ト云 雜談のり 六十六ウ

一 大工兵衛入道了徳等の法号のり 六十七ウ

一 刈額田郡浦辺村ニ移リ住セト云 一条のり 六十七ウ

一 對馬の宗氏ハ平知盛の長同ト云る 六十七ウ

一 小寺友多勝考及子孫のり 六十七ウ

一 字のり 六十七ウ

一 清人種々の姓と板ノ渡と云る 六十七ウ

一 本屏々詩のり 六十八ウ

一 続日本記、四和銅元年ト云 一条のり 六十八ウ

一 後室威神一重氏皇帝ト云 一条のり 六十八ウ

一 続日本紀ノ一文武天皇ノ即位二年十月遷

多氣大神マラ下度會耶ト云る 六十八ウ

一 延喜大祓文式伴作宗岐宮月詠宮共ニ

詔ニ神名ト云 一条のり 六十九ウ



任玄徳神皇次子白とりの糸のり 六十九

万葉第三丹生王の歌のり 六十九

万葉第十六神樂能小蛇と云今按のり 六十九

無題詩集一六月後のり 七十九

倭姫命世記乙若命以麻神葛 靈等令

後のり 七十九

天津祝詞のり 七十九

岡田水と山傳紀のり 七十九

西朝王樹のり 七十九

石田之のり西と岡ヶ糸の禰僧搦捕献のり 七十九

勢田平井ノ名場首は洲湯の昆沙門堂ト云ハ

のり 七十九

正徳中躬禰来破沛と云ハ一は殿門を修

のり 七十九

勝速日と饒速日と御子孫等のり 七十九

香語山余のり 七十九

饒速日とのり 七十九

神武帝即位始天富命天種子命等禰祿

の權樂のり 七十九

我帝祖瓊々杵尊降跡地のり 七十九



- 應祚天皇と八幡と号し〜七十六
- 浮屠の事と海湖八神竜の変地〜七十六
- 北畠信雄と上野女信包ト識して南洋幣七十七
- 北畠幣の畧抄〜七十七
- 今の堺州松坂ハ神河五百の畧と〜七十七
- 北畠家は信意といふ人を〜七十八
- 今川了俊の戒は水方田の器ニ從ト〜七十八
- 春日井弥山田房六所明神の〜七十九
- 山田房如喜村六所明神の〜七十九
- 後拾遺集は乃美朝臣三坂の奇の〜八十

- 伊勢物語外題〜八十
- 倭奇は志川〜志川のお〜八十
- あゝ縣の字と申〜八十一
- 或同桃弓葺の矢の〜八十一
- 同國を尋ね母子村分り〜八十一
- 始ト〜八十二
- 侍の形披〜八十二
- 源家弓傳〜八十二
- 後氏弓傳〜八十三
- 紀氏弓傳〜八十三



一 昔蓮岳の男子多く東に下り武と稱せし事 八十三

一 侍従ハ文武と名内舍人ハ武と名武徳と業とす 八十三

一 鄙夢周々東文選一百一傳類の語 八十三

一 大夫好家 近衛 今度園東下向の次摺田御姐 家久

一 つらせり 六十四

一 え和の事我 公室の徳友いとも 八十五

一 或人曰記語文と然地定平の 八十五

俗ト多 八十五

一 貞徳公武藏教ト師兄ト毒海師ト茶山ト

云傍 八十六

一 法華文句ト鳩槃荼鬼の譯説 八十六

一 明祿迄不辻の正訛集の説 八十六

一 世少々魚籃観音の像 八十七

一 或人曰我 敬公鹿の織 八十七

一 或人曰中世の斗 八十七

一 高田の名所音 八十七

一 藤本庄 八十七

河 八十九



一 樓室連の姓ハ上宮左子山城巡りの時今何  
—と云る八十九

一 天皇の曆向蘭陀の曆八十九

一 曆家春秋の起りん舎と申る久八十九

一 我玉江古廷臣切何と死すまハ諫諍とた多し

号とす九十九

一 寺蓮院皆丹果曆と對せりと云る九十九

一 御陽殿のと抄お九十九

一 和漢僧現と古今不同と云る九十九

一 明王百穀が三拙曰云一条九十九

一 後系倍頼同成親九十九

一 我所下の小兒暴淫の症九十九

一 六月未漢人又せ九十九

一 為家々奇九十九

一 或傍齊食の的戒尺天皇本九十九

一 仏經より女人自沸くる湯罐よ入て骨肉

と贅歌九十九

一 贅田海海魚九十九

一 又一種點鯛ト云魚九十九

一 洛東真正極楽寺不退轉の念仏九十九



一 靴の音とつげ心とくさまト云る九十七

一 府下貧乏の女世渡りよせりて自ぬり体

——九十七

一 数珠の多か絶脱よ有る九十九

一 船よあつ志撰詞多き九十九

一 玉笑零音志九十九 初生初死三

一 去下る南京廣東私海と漂泊したる三

一 従古の令名三

一 後呂沖波の奴系店三の老婆の糞三

つげたる三

一 本市場酒店よ三 白朮と多く貯三

一 富士のすそ三 時那三 穉師坊が

塚三

一 京師中園寺三 娘三 とか三 一三 乞三 と三 妙三 と三 母三 心三

——三

一 玉穉三 登三 山三 名三 敏三 志三 杉三 結三 面三 と三 云三 三三

一 昔に徳帝の三 西三 宇三 花三 海三 玉三 女三 面三 足三 の人三 有三

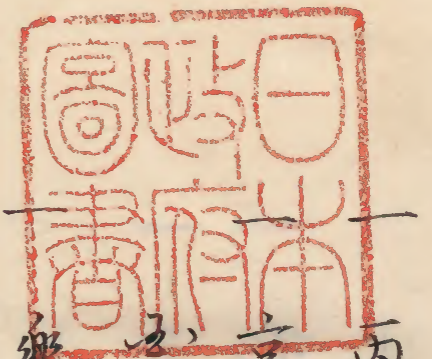
——三

一 小治の三 屯三 兵三 八三 坂三 光三 嚴三 院三 以三 文三 の三 三三

三三



一 北畠家の繪文のしり 百六十九  
一 渡邊魚のしり 百七十九



丙午六月十八日上校説伝の契と税ひとりしり 百七十九  
子保土の白月たる法皇の命よりして英法  
の老の水と汲みひとりしり 百七十九  
樂の大左靴とりしり 百八十九



法皇の九部たる孫と名とりしり 百八十九  
加久縄と云ふしり 百八十九  
福徳はるち更正別の子掃部正頼の子孫

のしり 百八十九



